

第一章 鬼神様の花嫁

「——では、私どもはこれで失礼致します」

介添えの禰宜^{ねぎ}たちが一礼し、そろそろと階段を降りてゆく。

木々が生い茂った鬱蒼とした林の中を通る、苔むした長い長い、石造りの階段。そこが下界と鬼神様^{おにがみ}が住まう幽世^{かくりよ}をつなぐ、唯一の道だ。

山のひんやりと湿った空気が、肌にとわりつく。介添え達がいなくなつたあとは、一層温度が低くなつた気がする。

ひとり残された私は、白無垢の裾を摘まみ上げ、目の前の祠をじつと見据えた。

今日、私は鬼神様へ嫁入りする。

【鬼護村】——それが私の産まれた場所。

その名の通り、鬼を守り神として信仰している。

村人たちの篤い信仰のたまものなのか、鬼の加護を受けたこの村は、
ほぼ厄災の憂き目に遭うことはなかったという。

人と鬼との架け橋となるため、代々巫女の家系である私の一族から、
鬼神様へ花嫁を捧げるしきりがある。

数百年に一度生まれるという、桜の花びらのかたちの痣を持った女
だけが花嫁たる資格を持つ。

そして私は、首筋にその証を刻まれてこの世に生を受けた。

『お前は二十歳になったら、鬼神様の花嫁になるんだよ』

幼い頃から祖母にそう言い聞かされて育ってきた。

この年になるまで、男性との交流を一切許されずに育った。学校の

友人たちは、私の境遇を知って「時代錯誤だ」なんて憤っていたけれど、それを苦痛だとか嫌だと思ったことはない。

それが私の運命（さだめ）なのだから。

（……鬼神様って、どんな方なんだろう？）

人間の男性とのお見合いであれば、写真のひとつも見せてもらえるのだろうけれど。

相手が神様では、そんなものあるはずもなく。

言い伝えられている話の中から推察するしかない。

威厳に満ちていて礼節を大切にされるお方で、とても大きく、力が強い方らしい。

（……それだけじゃ何も分からないけど……）

でも、どんな相手であろうと私の夫には変わらない。

そして、神様の妻となる私には、人間と鬼の縁を繋ぐ大切な役目があるのだ。

それをしっかりと果たさなくては。

「——鬼神様の花嫁が参りました」

祠へ向かい正座し三つ指について、地面に深く頭を擦りつける。

入り口に掲げられているぼうつと松明が灯り、どすん、どすんと地響きのような音が聞こえてきた。

「……っ」

目の前に現れた『彼』を見て息を呑む。

身長は、ゆうに二メートルはあるだろうか。

上半身裸で、腰に長い布を巻き付けただけの、質素な格好だ。

けれど、そのシンプルな姿が『彼』の肉体美を引き立てている。

鍛え抜かれて一切の無駄のない、筋肉に覆われた肉体。褐色の艶やかな肌。

裂けたような大きな口からは、真っ白な牙が覗いている。

紅葉のように鮮やかに色づいた、縮れた赤毛。頭部に生えた真っ黒な二本の角は、黒曜石のようにしつとりと光っていて。

燃えるように真っ赤な瞳は一点の曇りもなく澄み渡っている。

（なんて、美しい人なんだろう）

思わず見とれていると、鬼神様が顔をしかめて、私をにらみつけた。

「……何を見ている？」

「あ……っ。不躰な真似をしてしまい、申し訳ございません……！」

慌てて頭を地面に擦り付けてお詫びすると、鬼神様は、呆れたようなため息をついた。

「まあいい。一緒に来い」

鬼神様がスタスタと歩き出す。

私は慌てて、あとを追った。

「……しかし、人間も律儀なものだな、数千前も前の約束をいまだに守ろうとするとは」

暗い洞窟の中。道なりに置かれた松明の明かりだけがぼんやりと辺りを照らす。

私を先導するように少し前を歩きながら、鬼神様がぼやく。

「もう、神頼みで五穀豊穰を願うような時代でもないだろう。そなたも、勝手に俺の嫁にさせられてかわいそうにな」

なんだか鬼神様は、あまりこの結婚を喜んでいないようだ。私のことが、お気に召さなかったのだろうか？

「私は、鬼神様の花嫁として生まれたことを誇りに思っています。まだ若輩者ゆえ、至らない点もございますが、精一杯お役目を務めさせていただきますので――」

「ああ、そういう堅苦しいのはいい。そなた、名はなんと言う？」

「……小夜^{さよ}、と申します」

「小夜、か。俺は獅道^{しどう}だ。これからよろしく頼む」

「はい、獅道……様」

「うーん、様は要らないんだがな。呼び捨てでも構わん」

「そつ……そういうわけにはいきません！ 獅道様は神様なのですし」

「分かった分かった。好きに呼べ」

「はい。……あつ」

道ばたの石に足をとられて、よろけてしまう。

「おい、大丈夫か？」

「はい……申し訳ございません」

慣れない着物を着ているせいだろうか。白無垢は片手で裾を持ち上げないといけないので、いつもより歩きづらい。

（普段は巫女の衣装だから袴だし。もつと、着物で歩く練習しておけば良かったな……）

「ここは足元も悪いしな。その衣装では歩くのも大変だろう」

「いえ、そんな。あの、構わず先に進んでください」

獅道様は無言で身を屈めると、ひょい、と私を抱き上げた。

「……!？」

「俺が運ぶ。そなたの足取りでは、着くまでに日が暮れてしまいそうだからな」

「し、獅道様っ。ほ、本当に大丈夫ですからっ、そのっ……」

「暴れるな。取って食いやしない」

私をお姫様抱っこして、どすん、どすんと足音を轟かせて歩く。

荒々しく見える仕草とは裏腹に、私を抱く手つきはとても優しい。

まるで、壊れ物を大切に扱うかのようだ。

（ああ……なんだかすごく、安心する）

そつと、獅道様の厚くたくましい胸板に頬を寄せる。

人間よりも体温が高いのだろうか。触れると、とても温かくて、心

地良くて。このままウトウトしてしまいそうだ。

「そろそろ着くぞ」

獅道様がぼそりと呟く。

道を進むごとに、薄暗かった洞窟に光が差してゆく。

そして――

「わあ……」

色とりどりの花が咲き誇る庭が、目の前に現れた。

薄桃色の空からは柔らかい日差しが注ぎ、青々と葉を茂らせた木の上で、極彩色の羽を持つ鳥が歌うように鳴いている。

「ここが、幽世^{かくりよ}だ」

幽世。神様たちが住まう神域。

（話には聞いていたけれど、こんな綺麗なところだったなんて……）

まさしく神の住まうにふさわしい理想郷だ。

そして、今日からここが私の居場所。

（なんだか、夢を見ているみたい……）

ふと、庭の中心にたたずむ桜の木が、目に留まった。

「幽世でも、桜が咲くんですね」

ひらひらと舞い散る桜を見上げる。

その姿は、私の家にご神木として植わっている桜と全く同じで——
懐かしい気持ちになる。

「人間界と幽世を繋ぐ樹だからな。確か花嫁の証も、桜の花びらの印
だったか」

「はい。私の証はここに」

髪の毛をかきあげ、首筋の痣を見せる。

獅道様はじっとそれを見つめ、口を開きかけた。

その時――

ざあっ……

風が桜の木を揺らし、花びらが吹雪のように散って私たちを取り巻く。

まるで、私たちを祝福しているかのように。

（……なんて、ロマンチックすぎるかな）

「花びらが、ついているぞ」

獅道様が身を屈め、私の綿帽子についた桜の花びらをそつと指でつまんだ。

「あ……ありがとうございます」

「……ふん」

獅道様は鼻を鳴らし、顔をそむけてしまった。

「案内の役目は果たしたし、俺は部屋へ戻る。分らないことがあつたら、世話係の雲雀^{ひばり}に聞いてくれ」

淡黄色の着物を召して、白髪をきつちりとお団子にまとめた小柄なおばあさんが、すつと姿を現す。

「雲雀と申します。どうぞよろしくお願いします」

「よ……よろしくお願いします」

「では雲雀、小夜を頼む」

雲雀さんと入れ替わるように、獅道様は屋敷へすつと引っ込んでしまった。

「……」

「さあ、では小夜様のお部屋へご案内しましょう。こちらへどうぞ」

雲雀さんについて、部屋へと向かう。

獅道様のお屋敷は、古き良き日本家屋、といった佇まいだ。

いわゆる数寄屋造りに近い建物で、軒の深い庇と格子戸が美しい。

屋外には濡縁が設けられていて、ここに腰掛けて庭を眺めながら獅道様とお茶を飲めたら素敵だろうな、なんて妄想してしまう。

しかし、とにかく広い。自分の部屋に到着するまで、長い長い廊下を歩かねばならなかった。

（ひとりであどろり着けるか、不安……）

そして、私に与えられた部屋もかなり広く、実家の家族全員住めるんじゃないかというほどだった。

白無垢を脱いで用意された部屋着に着替えると、ようやく一息つく

ことが出来た。

ガウン風のゆつたりとした浴衣で、とても肌触りがよく落ち着く。部屋にはひととおり家具が揃っていて、暮らすには不自由なさそうだ。

でも――

（寝具も用意されてるってことは……獅道様と一緒に寝るわけじゃないのかな）

部屋の隅に置かれている、質の良さそうな布団をちらりと見やる。どう見ても一人用のサイズだし、私はここで寝起きする前提なのだろうか。

「足りないものがございましたら、なんでもお申しつけ下さい」
私の白無垢を綺麗に畳んでくれた雲雀さんが、柔らかに微笑む。

「ありがとうございます。あの……寝室も獅道様とは別、なのでしょうか？」

「ええ。以前は同じでしたが、獅道様から分けるようにと仰せつかつておりまして」

「……そう、ですか」

「ですが、今宵は【御魂結びみたまむすびの儀】がございますので、同衾となっておりまして。儀式を無事済ませられましたら、どうぞご自由になさってください。獅道様のお部屋は、小夜様のお部屋の向かい側にございますので」

雲雀さんが意味深な笑みを浮かべた。

そう、今夜は私にとって大切なイベント——【御魂結びの儀】があるのだ。

鬼神である獅道様と人間である私が真の夫婦となるために、魂の交歓を行う儀式。

はつきり言う、セックスだ。

獅道様に純潔を捧げるために、私はこれまで処女を守ってきた。

けれど、夫となる鬼神様を悦ばせるための艶技やしぐさは、しっかりと学び身につけてきたつもりだ。

鬼と人との縁を今後も繋げてゆくためにも、しっかりと役目を果たさなければならぬ。

私はぐつと拳を握りしめた。

——そして、夜になった。

ふたりだけのささやかな夕食を終えると、獅道様が部屋の隅に控え

ていた雲雀さんへ声をかけた。

「雲雀、風呂は沸いているか？」

「ええ、もちろんでございます。お二人一緒に入られますか？」

（い、一緒に……！）

どくと胸が高鳴る。

ちらりと雲雀さんを見ると、またもや意味深な含み笑いで頷いてくれた。

私と獅道様がより親密になれるよう、気遣ってくれているのだろう。

（確かに、夫婦なんだから一緒にお風呂に入ってもおかしくないし）

裸の付き合いをすれば、心も身体も一気に距離が縮まること間違いなしだ。

期待を込めて獅道様へ視線を向ける。

だが――

「いや、小夜に先に入ってもらおう。疲れているだろうし、別々の方がゆつくり出来ていいだろう」

あつさりと却下されてしまった。

ここで「いいえどうしても一緒に入ります！」と、ごり押し出来たらしいのだけれど、鬼神様に向かつてそんな無礼な真似は出来ないし。「さようでございますか。では、小夜様のお着替えの準備をいたしますので」

雲雀さんが申し訳なさそうな視線を送る。

私は「気にしないでください」と口だけで言い、微笑んだ。

獅道様は私を気遣って、ああ言ってくださったんだし。

それに、夜は同衾を許されている。

さすがに一緒の布団で身体を寄せ合って眠れば、艶めいた雰囲気になるに違いない。

その時が勝負だと言いきかせ、私は風呂場へ向かった。

お風呂から上がった後。

自室で寝る前の身支度を整え、気合いを入れ直して獅道様の寝室へ向かう。

「獅道様。入ってもよろしいでしょうか？」

ふすま越しに声をかけると、若干眠たげな「どうぞ」という答えが返ってきた。

「失礼致します」

正座をし、三つ指をついて礼をする。

下半身だけ布団に突っ込んで横になっていた獅道様は、私に背を向けたまま、ちらりと視線だけをこちらへ送る。

「何の用だ？」

「あ……あの……寝る時は同衾しても良いと、雲雀さんが仰っていたので……」

「ああ。別に構わんが」

獅道様はぼりぼり、と頭を搔いてふわあと欠伸をした。

（……もしかして、迷惑なのかな）

でも、さすがにここで引き下がるわけにはいかない。私たちが夫婦となる大切な儀式のためだ。

ずり、と獅道様が僅かに身体をずらす。私のために、布団のスペー

スを空けてくれたのだろう。

一緒に眠ることは、許してくれたようだ。

「お隣、失礼します」

布団をそつとめくり、獅道様の横へ滑り込む。

布団の中は既に彼の体温で温まっていて、冷え切った足がほこほこ
とぬくもってゆく。

おずおずと背中を合わせるようにして身を寄せると、寝間着越しに
彼の体温が伝わって。

一気に鼓動が高鳴る。

肌を寄せ合えば、きつとこれが合図だと獅道様も勘づいてくださる
はず。

（ここから互いに口づけを交わして、身体をまさぐりあって……って

私、なんて淫らな妄想を……!)

いや、これは神聖な儀式なのだからと自分に言いきかせ、獅道様からの反応を待つ。

が――

「……………ぐう……………ぐう……………」

「……………え……………?」

あっけにとられて、彼の広い背中を見つめる。

どう考えても、寝ている。

しかもぐっすりと。

(そんな……初夜って、婚礼の日に行うものじゃないの……?)

この展開は予想外だった。

今日一日、【御魂結びの儀】のことばかり考えていたというのに。

（……もしかして、獅道様もお疲れになっているのかな）

私を迎えるために色々と準備をしてくれていたようだし。

気疲れして、セックスどころではないのかも。

そう自分に言いきかせて、なんとか眠ろうとしたけれど……

結局、朝まで眠りにつくことは出来なかった。

第二章 夜這い大作戦

——それから、しばらくが経った。

今だに獅道様とは、初夜を迎えていない。

夕食だけは一緒に食べているけれど、昼間は会合だなんだと忙しうに出かけていくし、夜はほとんど自室にこもりきり。

夜は同じ布団で寝ているのだけれど、いつも彼はすぐに寝てしまう。初めの頃は、疲れているのかも、とかそういう気分じゃないのかも、などと何とか理由をつけて納得しようとしていたけれど。

ここまで拒絶されると、さすがに落ち込んでしまう。

「……獅道様は、私のことがお嫌いなのでしょうか？」

雲雀さんが用意してくれた朝食を食べながら、ポツリとそんなことをこぼしてしまふ。

雲雀さんは配膳の手を止めて、少し困ったような顔をした。

「……そのようなことはございませんよ。ただ……実はこれまで、花嫁様で獅道様と添い遂げた方はいらつしやらないんですよ」

「……っ！」

ぼろり、と持っていた箸を取り落としてしまった。

「そ、それって、何百年もずっと……？」

「獅道様が鬼神としてこの地に降臨なさってから、数千年ずっとです」

「……獅道様の理想って、もしかしてもものすごく高いんですか？ お眼鏡に叶う方がいらつしやらなかったとか……？」

「いえ。そのようなことはございません。ただ、寄り添ってください
花嫁様をずっと待つていらつしやるように見えます。獅道様は、孤独
なお方ですから」

『もう、神頼みで五穀豊穰を願うような時代でもないだろう。そなた
も、勝手に俺の嫁にさせられてかわいそうにな』

初めて会った時の獅道様の言葉が、頭をよぎる。

（もしかして獅道様は、私がイヤイヤ嫁いできたと思つていらつしや
る……？）

だとしたら酷い誤解だ。私は獅道様の妻として、生涯添い遂げる覚
悟は出来ているというのに。

「わ、私は……獅道様がお嫌でなければ、ちゃんと夫婦になりたい
です。獅道様に、寄り添いたい……！」

箸をおき、きつと顔を上げる。

雲雀さんが目を丸くして、私を見た。

「……それは、まことでございますか？」

「私の本心です。は、初めてお会いしたときから、その……とても、お優しく素敵な方だと、想っていたので……」

「まあまあ、獅道様をそんなに想ってくださっているなんて……わたしうれしゅうございます」

雲雀さんがそつと目元を手の甲で拭う。

「この屋敷は私と獅道様だけでは広すぎます。小夜様と一緒にくださったら、どんなに獅道様も嬉しいことでしょう」

「……ですが……それも【御魂結びの儀】を行わなければ、叶いませんよね。どうすればいいんでしょう」

「そうですねえ……小夜様から積極的に誘いする、というのもひとつの手かと」

「……と、言いますと」

「……夜這い、でございます」

真顔で言われて、顔が真っ赤になってしまった。

「よっ……夜這いつ!？」

「はい。大国主神様おおくにぬしのところへお使いへ行つた時に、奥様が大変積極的な方で、自ら夜這いを行つたと聞きました。お陰で夫婦円満だそうです」

女性から手を出すなんてはしたない、と想っていたけれど。

確かに、獅道様から手を出してくださいなら、こちらから攻めるしかない。

「雲雀さんっ、私、やります……！　どんな風にすればいいか、教えてください！」

雲雀さんは微笑んで頷いた。

——そして、その夜。

（す、すごい格好……）

湯上がりに雲雀さんが用意してくれた寝間着は、すけすけのシースルー浴衣、というものだった。

乳房と股間が丸見えで、かなり過激な格好だ。

しかも、雲雀さんに「もつと露出度を上げたほうがよろしいかと」と言われ、思いつきり衿をはだけられて肩を出されてしまったし。

おかげで胸の谷間がばっちり見えてしまっている。

しかも、【御魂結びの儀】を行うのなら下着は不要だと雲雀さんに言われたので、今の私はノーパンだ。

（裸より恥ずかしいかも。でも、これで獅道様が興奮してくださるなら……）

「……失礼致します」

ふすまを開けると、獅道様は布団にねそべり、煙管でタバコを吹かしているところだった。

いつものようにちらり、と視線だけこちらを投げたのだが、私の姿を見た途端、「げほっ」と咳き込んだ。

「さ、小夜……なんだ、その格好は」

「今日はとても暑いので……涼しげで良いかなと……」

「幽世に暑いも寒いもないと思うが。人間は違うのか？」

「は、はい……す、少し暑いなって……」

ぱたぱたと手で顔を仰いでみせる。実際、恥ずかしさで顔が熱くてたまらないし。

「あ、あの……お布団に入ってもよろしいでしょうか？」

「好きにしろ」

いつものように、獅道様が身体をずらしてスペースを空けてくれる。相変わらず私に背中を向けたままだけれど。

私はそこへ潜り込み、ぴつたりと背中へ自分の胸を押しつけた。獅道様がぎよつとして、こちらを振り向く。

「……!? 小夜、何をしている？」

「お布団が狭いので……身を寄せております」

「いつも普通に寝られてるだろ」

「きよ、今日はちよつとだけ、私のはみだしそうなので」

「では、俺がずれよう」

獅道様ももぞもぞと動き始めたので、慌ててしがみつく。

「あ……っ、ま、待つてくださいつ！ 動かないで……！」

（ああもう、全然うまくいかない……！）

『露出の高い衣装を身につけ、身体を密着させれば自然と殿方の情欲も高まるはずです』

——って、雲雀さんが力説してたのに。

獅道様には効果がなかったようだ。

「……小夜。今日は何か変だぞ。どうした？」

獅道様がよつこらしよ、と起き上がり、じっと私を見た。

私もそれに合わせるように、もぞもぞと起き上がり向かい合う。

（……変に誘惑しようとするより、ちゃんと話した方がいいかも）

「……っ……あ、あの……わ、私たち、夫婦になつてしばらく、経ちましたよね」

「ああ。それがどうした？」

「……み、【御魂結びの儀】を行う気配がないので……その……」

もじもじと指を遊ばせながら言うと、「ああ」と獅道様が全て悟つたような顔をした。

「なるほど、雲雀にでも入れ知恵されたか？」

「……っ、そ、それは……」

「隠すな。あいつの考えそうなことだ。だが、そなたに俺と契るのは無理だ」

「…………！」

冷ややかに言い放たれ、どん、と真つ暗な谷底へ突き落とされたような気分になった。

「…………どうして、そのようなことをおっしゃるのですか？」

「俺は神の中でもひとときわ身体もマ、ラも大きい。そなたの小さな身体では到底受け止められないだろう」

「そ、そんなの…………やってみなければ、わからないじゃないですか
！」

「では、実際に試してみるといい。泣きべそを搔いて、下界へ逃げ帰る羽目になっても知らんぞ」

「んぶ…………っ♡」

口をこじ開けられ、節くれだった指先を差し入れられる。

「うあ♡んう♡んぶ♡うう♡」

ぐじゅぐじゅと人差し指で口の中をかき回される。

（獅道様の指っ♡おつきくて太くて、ゴツゴツして……っ♡なんだか、えっちな気分になっちゃう……♡）

「小さな口だな。俺の指を咥え込むので精一杯じゃないか」

くち……♡くちゅ♡くちゅ♡

指を抜き差しされると、なんだか口の中を犯されているみたいな気持ちになって、おへそのあたりがうずうずする。

「この指をそなたの喉に突っ込めば、たちまち裂けてしまうだろう。それでも俺とまぐわいたいのか？」

ぐぢゅ♡ぢゅぼ♡ぢゅぼ♡

唾液まみれの口の中を攪拌されて、淫らな水音が響く。

「ん……♡ふう……♡んぷ……♡はふう……♡」

口呼吸がうまく出来ないせいか、頭がぼーつとしてきた。

反射的にちゅうつと指に吸い付くと、獅道様がびくつと肩を震わせる。

「……っ。自分から吸い付いてくるとは、淫らな……っ」

「ふぁ……すみまふえ……んう……♡」

「それだけ淫蕩なら、遠慮は要らん」

獅道様が私の口の端を指でぐにっ♡と引っぱりながら、片手で私の浴衣へ手をかける。

引きちぎりそうな勢いで衿をがばつと剥かれ、乳房がぷるんと揺れて飛び出す。

「……っ、あっ……♡」

「小柄なくせに胸だけは一人前にデカいんだな」

大きな手で乳房を包まれ、ぎゅうう♡と握り潰される。

「っ、や……はぁ……♡あ、獅道、様っ……♡」

訪れるのは、強烈な痛み。

獅道様の無骨な指先が、私の乳房へめりこんで紅く痕を残してゆく。

「花嫁としての務めを果たそうとするのはご立派なことだが、義務で求められても嬉しくもなんともない。俺を籠絡しようとしたことを後悔するんだな」

「っ、え、あ、あぁ……♡」

力をこめ、ぐに、ぐにっとな掌の中で乳房をこねまわされる。

私の唾液にまみれた指がぬるぬると肌を這い回り、痛いだけだった

乳房が、じわつと熱を孕んで重たく腫れてゆく。

それは腰まで降りて、ぞわぞわと悪寒に似た何かが身体を這い回っているかのような。

(何……これ……♡こんな感覚、知らない……っ♡)

「男を悦ばせるために在るような肉体だな。神に捧げるには勿体ない。そなたに懸想していた男もたくさんいたのではないか？」

「そ、そんな……ふああっ♡」

まるで果実を搾るかのように乳肉を根元から扱かれる。そのまま乳首をぎゅううゝつと摘まみ上げ、指腹で押し潰す。

その度にぷちゅつと熱が弾けて、じんじんと腰が重だるくなつてゆく。

「んはっ♡ひっ……んう♡」

「いっちょ前に乳首勃たせて。乱暴にされるのが好きなのか？ それ

とも……他の男に弄られ慣れているのか？」

「ほっ……他の人になんてっ、触らせたことありません！ 私の身体は獅道様だけのものです……！」

「口ではなんとでも言える。神に純潔を捧げるなんて愚か者はそうそういないからな。まあ、そなたが生娘であろうとなかろうと、愉しめればそれで良い」

「ちが……ほんとに、わたし、は……ふああっ♡」

ぐに♡ぐに♡と紅く色づいた乳房が掌の中で形を変える。

乳肉を握りしめたまま、今度は爪の先でぴん♡ぴん♡乳首を弾かれる。

腰に溜まったぞわぞわが一気に弾けて、びくびく♡と上半身が大きく揺れた。

「ひあっ♡ち、乳首っ♡ぴんぴんするのっ♡だめえっ♡」

ぴんっ♡ぴんっ♡

かりっ♡かりっ♡

力強く弾かれたり引つかかれたりを繰り返し、お腹の底がずくんと疼く。

ずっと腰にまとわりついているぞわぞわ♡とじわじわとこみ上げる熱が混ざり合って、お腹の真ん中がきゅっ、と搾られるような感覚に襲われる。

「い♡ああっ♡んふう♡はっ♡はあ♡」

「腰をそんなにへこつかせて……いやらしいな」

「申し訳……♡あっ♡ございませんっ……♡からだ、がっ♡勝手に動いてえ♡止まらなくてっ♡」

(何これ……どうなってるの……♡)

まるで自分が自分じゃないみたい。

勝手に身体が動いて、もつと気持ち良くなりたいてって叫んでるみたい。

「っああ♡へんっ♡私っ♡なんだか変ですっ♡身体♡あつくてっ♡
じんじんしてっ♡っああっ♡」

「この淫乱め、乳首でイくのか？　ならば思い切り気をやるといい
……！」

きゅうううう♡

思い切り乳首を摘まみ上げられ、ぐにぐに♡と押し潰される。

「っはっ♡あっ♡うああああっ♡♡♡♡」

がくがくがっ♡

全身をわななかせ、獅道様の腕の中へ崩れ落ちた。

「……いったようだな」

（イク？　これが？）

（私……おっぱい弄られただけで、あんなに乱れて……いつちやうな
んて……っ）

「へばつてる場合じゃないぞ。本番はこれからだ」

ぬるう♡とゴツゴツとした指が浴衣の裾を割って股間へ触れる。

「下着をつけていないのか。浅ましく俺に抱かれることを期待して来たのか？　残念だったな、望みが叶わなくて。だが、せめて指でイカせてやるから安心しろ」

ぬち♡ぬち♡と溢れる蜜をこつい指に纏わせ、淫豆の包皮を指でく
りん、とずらす。

ぷりん♡と桜色の肉芽が露わになり、恥ずかしげに震えている。

「はっひ……♡ふぁ……♡」

（うそっ♡クリの皮っ♡剥かれちゃったっ♡）

「なんとも小さく、頼りない小豆だ……少し力を入れたら潰してしま
いそうだな」

獅道様の指が、淫豆を左右からきゅ♡と摘まむ。

剥き出しの肉芽にはそれだけでも強烈な刺激で、お尻がびくびくっ♡と強く引きつる。

オナニーは何度か興味本位でしたことはあるが、指で少しクリを撫でたり、おまんこの入り口をさする程度だった。

微弱な刺激しか与えられてこなかったこの身体に、獅道様が流し込む愉悦はあまりにも甘美で。

身をくねらせて酔いしれてしまう。

「少し触れただけなのにやけに感じているな。そんなにここを弄られるのが好きか？」

「っは♡な、慣れていない、もので……♡んう……♡はあ、んあ……♡」

「フン、今さら貞淑ぶっても遅い。こんなに小豆を膨らませて……どうせ男に弄られ尽くしているんだろう？」

くに♡つと指先が敏感になった花芽を押し潰し、しこしこ♡と扱きあげる。

まるでクリトリスがおちんぼになったみたいに、どんどん大きくなつてゆく。

「はっひ♡あっ♡しこしこ♡やあ……っ♡」

「甘ったるい声を出して、媚びを売っているつもりか？ 俺には通用せんぞ」

こりゅ♡こりゅ♡くりくり♡ぐにいい♡

たっぷりと愛液を塗りたいくられた花芽を、今度は根元から押し潰して指腹でこね回す。

淫芽の中心が甘く痺れ、じわあ……♡とおまんこが潤んで蜜を滴らせる。

こし♡こし♡こし♡こし♡

容赦なく肉粒を蹴られ、強烈な快感に勝手に腰が浮き上がってかくっ♡と小刻みに揺れる。

「っひ♡あっ♡うああ♡つく……あっ、ああああ〜♡」

ひくひく♡と両ももをひきつらせ、あっという間に達してしまった。

(初めて……男の人の指でっ、イっちゃったあ……♡)

「ぼんやりしているヒマはないぞ。そら、俺のマラが入るかどうか、試してやる」

絶頂の余韻に浸る間を与えず、獅道様が私の膝を掴んでぐつと左右に開かせる。

ぐぷっ……♡

獅道様の太い指が、秘裂を割り開いて中へ入ってきた。

「っ、ひ、あああ……っ!？」

お腹の中を強引に引っ張られているかのような感覚に囚われる。

「指一本でもキツキツじゃないか。こんな小さなほ、とで、俺のデカマラを呑み込もうなんて無謀にもほどがある」

「ゝいっ……あっ♡う……♡あああ……♡」

ずにゆ♡ずにゆ♡ぬるう♡ずぶん♡

獅道様の指先がおまんこの入り口付近をゆつくりと擦り上げる。

中で抜き差しされる度に、肉天井が擦られてじいん♡と熱く潤む。

（うそお♡きもちいい♡中つ、こすこすされるの好き♡）

いつしか私は、獅道様の指の動きに合わせて腰をくねらせていた。

「自分から股を開いて、腰を振りたくって……一体何人の男のモノを咥え込んできたんだ？」

「わ……私はっ♡先ほども申し上げましたが……っ♡男性と交わるどころかつ♡言葉を交わしたことですらございません……っ♡」

「嘘をつけ。そなたのような魅力的な女性を、男が放っておくはずがないだろう」

「ほんと……うです♡お願いです、どうかっ♡信じてっ……♡」

「だとしたら、指ごときで何故こんなに感じる？」

「それはっ♡獅道様の指使いがっ♡えっちすぎるからああ……♡」

「淫乱め……っ！ もっと手ひどくして、二度と俺とまぐわろうなんて思わせないようにしてやる！」

ぐっちょ♡ぐっちょ♡ぐっちょ♡

指がおまんこの上のざらついたところを執拗に引つ搔く。

ぶぽっ♡ぶぽっ♡ぶぽっ♡ぶぽっ♡

聞いた事のないような下品な音が、おまんこから響いてくる。

お腹はずっとジンジン熱くて、ぷちゅっと時折透明な液体が小さく吹きだしてくる。

どろどろの肉襞をぐちゃぐちゃにかき回されて、お腹が熱くて溶け落ちてしまいそう。

ずつとふわふわして、地が足につかなくて。

自分からもつと気持ち良くなれる場所を探して、腰を突き出して淫らにくねらせている。

これは本当に、私の身体なんだろうか？

「はっひ♡あう♡んああ♡獅道様っ♡わっ♡わたし♡もお♡わけ♡わかんなくなっ♡つ♡なんかっ♡なんかさごいのきちやうっ♡」

「くっ……生意気に俺の指でイクつもりか！ ああもう勝手にしろ！ イケ、へこへこ腰振って指マンでイキ狂えっ……！」

「っおっ♡、っおっ♡んほっおっ♡」

ぐちっ♡ぐちゅぐちゅ♡ぐぼっ♡

お腹をぐいぐいと掌で押され、中からぷっくりせり出した肉天井を
思い切り指で押し上げられる。

ぎゅうううう♡♡とお腹の底が緊縮して、おまんこの褌がうねるのが分かる。

（「あ♡♡これもおだめ♡♡くる♡♡びくびくくる♡♡我慢出来ない♡♡」）

「ひ♡♡あ♡♡ふ♡♡あ♡♡あああ♡♡♡」

ぷぢゅ♡♡

愛液がしぶいて布団をびちよびちよ♡に濡らす。

大きく仰け反ってビクビクと足を引きつらせる私を、獅道様がぐつと支えてくれた。

「……………はあ、はあ、はあ……………」

「これで分かっただろう？ 俺の指程度で一杯になってしまうそなたのほどでは、到底マラは受け入れられない。今ならまだ間に合う。こ

「ここを出て下界へ戻れ」